

第70回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2015年3月9日(月) 14時～17時

兼題「菜の花」

- 川井素山 ○冴え返るはやばや曇む露天商  
菜の花や峠の茶屋の草団子  
初蝶も知らず人なき今日明日  
引売りの鉢花を買ふ土匂ふ
- 保井寶正 ○轉りや大樹ふくらみ暮れ泥む  
菜の花や白き燈台溺れさす  
仲春の堅き蕾に文結ぶ  
吉報や春一番にのりにけり
- 青木英林 ○山里に賑はひ連れて来る燕  
華やかに雛の三代揃ひ踏  
畑仕事野蒜といふを余祿とす  
菜の花の向こうは碧き海と空
- 後藤克彦 ○菜の花や黄色一色房総路  
雪間増へ埋もれし棚田境見ゆ  
山里も古雛飾り村起こし  
春の田へ童心戻り近道す
- 佐久間喬 ○沈丁の一挿しで知る狭き家  
菜の花や土手の向こうも黄のひかり  
春一番顔を上げずに子の走る  
黄緑を酒と味はふ菜花かな
- 永井正孝 ○梅が香が陋屋に満つ日暮れかな  
菜の花や細波となり暖はこぶ  
水底にゆらりゆらりと蝌蚪の紐  
白梅やつがいも花を奪ひあひ
- 丸山酔宵子 ○白魚の黒目が覗く卵とじ  
湯煙にうなじ揺れたる朧月  
卒寿越へ梅見の母は杖いらず  
乃木坂の境内清し菜の花忌

菊地崇之 ○菜の花や碧を映して水平線  
青饅や父の御流御晩酌  
昨今は妻炊く菜飯待たざりき  
巢燕の姿偲ぶや残り藁

牧野里山 ○耕運機残しし隅を耕がやせり  
寒風の川面を滑るかもめかな  
菜の花の苦味もうれし酒のアテ  
山々の稜線映える冬の空

佐久間たか子 ○もう少し愛でていたくも雛納め  
菜の花やひと駅歩く帰り径  
菜の花の一輪の明<sup>めい</sup>和みけり  
啓蟄や土の匂ひに空仰ぐ

佐伯武雄 ○里山に揺れる菜の花灯る頃  
春眠や船漕ぐ人に肩を貸す  
春一番心だけでもスイッチオン  
孫たちと走る多摩川風光る

大山竜海 ○食卓に菜の花ありて日本かな  
菜畑にかくれんぼする子の勢い  
満天の星を映すか夜菜畑  
老い癒す梅の香流る小庭かな

吉田啓悟 ○淡雪やひとり言より始まりぬ  
なつかしき風に吹かれて桜餅  
しめさばに菜の花ひとつ冷酒かな  
落椿ひかりの降りてくるごと

山本草風 ○掲示板悲喜こもごもの二月かな  
哲学書背中に睡魔の春炬燵  
菜の花を髪に一輪稚子歩く  
万物の生气弾ける春日の出

金森純女 ○雛納早すぎたかや出戻りに  
げんげ摘む吾子のつむじの白かりし  
ダイヤルの電話見かけし春時雨  
花菜畑つむじのふたつ見え隠れ

次回 「萩句会」

日時 2015年4月13日（月）14時～17時

兼題『逃げ水』一句

当季雑詠三句 計四句